

票が「駿河市」に、静岡県委員二名が「静岡市」に投票したことで、「静岡市」に決定された。県の委員に対する県知事の意向が大きく働き、事実上新市名称を県知事がトップダウン方式によって決定した形になった。自治と参加にもとづく分権型社会が模索され、トップダウン方式に代わるボトムアップ方式による民主的な意思決定が求められる時代の趨勢からすれば、いかに時代錯誤の動きであ

るかが読みとれる。

「昭和の大合併」から半世紀を経た今日、歴史の教訓と実証の積み重ねの上に立った議論こそ重要であり、オホーツク地域自治研究所のような市民フォーラムが各地で開催されることを期待してやまない。学習会や研究会で拙著『市町村合併と自治体の財政』（自治体研究社、2001年）が少しでもお役に立てば幸いである。

## 北陸 PICK UP

このコーナーでは、北陸を中心に地域の様々な活動や身近な問題などを取り上げてレポートしていきます。

### 助け合いの仕掛け人 有償ボランティア団体 さわやか「いいね金沢」

畑やたんぼがぼつぼつ散らばる住宅街に、カラフルな看板がみえた。そこが今回うかがった、有償ボランティア団体 さわやか「いいね金沢」（以下「いいね金沢」と略す）の事務所だ。「いいね金沢」は、2001年3月、市民により自主・自発的に設立された、掃除・洗濯・外出介護といったホームヘルプ、託児などのサービスを提供する任意団体である。これ以外にも、事務所に併設の「ふれあいサロン」ではおしゃべりをする場の提供のほか、ミニ講座や手作り教室、カウンセリングなども行われている。分野問わず、“暮らしのお手伝いをする”のが「いいね金沢」の特徴で

ある。設立から1年経った現在、月曜から日曜までほとんど利用者は絶えることがない。

#### 入院中目の当たりにした現実

代表者の中野啓子さんは元整体師。2年前入院したことが、「いいね金沢」の立ち上げのきっかけとなった。自宅に帰りたがらない高齢者、介助が必要な高齢の親を引き取りたがらない子ども、介護保険導入後以前より負担が増え、思うように介護サービスを受けられない人。つらい現実が日々眼前につきつけられた。「他人事ではない。自分は大丈夫と」思っている、いつ自分もそういう境遇にな



るかわからない。」そして、将来自分の子どもに世話をかけたくないという思いもあり、困ったことを請け負って生活を支援してくれるサービスがあったらと、グループの立ち上げを考えるようになった。

退院後に、さわやか福祉財団や富山のNPO法人「デイサービス このゆびと一まれ」の存在を知り、決意は固まった。「このゆびと一まれ」は、3人の看護師が退職金を出し合って1993年に設立したデイケアハウス。年齢や障害によって線引きされている現状は、人間が生きる上で不自然な姿であるという考えの下、障害や痴呆症状の有無に関わらず子どもからお年寄りまで幅広い年齢層の人々を預かっている。

### 「いいね金沢」活動内容

「いいね金沢」では、新規登録料1,000円、保険料年間500円を支払えば、だれでも会員になれる。また、提供するサービスも「業者が仕事としてやっているのではなく、素人が

気持ちで行っているサービス」という位置付けであり、スタッフも経験や資格の有無は問われない。“できる人ができる範囲で生活のお手伝いをしあう”というのがモットーである。2002年3月現在、ホームヘルパーや保母、幼稚園教師、看護師、カウンセラーなどの資格をもった人も含め、スタッフは47名。年齢は18～76歳までと幅広いが、中心は20代後半から50代の女性。「自分ができることを手伝いたい」と自主的に集まってきた人ばかりである。金沢一円から登録があり、遠くは河北郡七塚町の人もいる。

提供サービス、利用状況は以下の通り

(2002年4月現在)。

- ・ホームヘルプ：高齢者世帯の家事援助が主で、掃除・食事の準備・草むしりなどの利用頻度が高い。70歳以上の利用者が多く、依頼の約3分の2がひとり住まいの高齢者からのもの。一度利用した人が繰り返し依頼をするケースも多い。
- ・託児：乳幼児の一時預かりが基本だが、保育園の待機児童を継続的に一定期間受け入れたこともある。夫婦で食事に出かける間預けていくケースなどもある。30分から利用可。
- ・ふれあいサロン：子どもから大人まで自由に使える。各種教室、講座も開かれる。利用者は圧倒的に“悩める母親”だとのこと。子どもが不登校や引きこもりで悩んでいる人、育児で悩みを持つ人などがやってきて

は、心のうちを話していく。

この他、コミュニティレストランも現在試行中である。

2002年3月時点で、利用会員は市内外の53世帯。利用数は、この1年の実績を平均すると、ひと月あたりホームヘルプは15～20件、託児は約30件、ふれあいサロン利用者はのべ約60人（各種教室・講座参加者数除く）。スタッフも含め、「いいね金沢」にやってきた人たちは総じて「ここはあたたかい。居心地がいい。」といった、なかなか帰りがたがらないとのこと。

### 「双方向性」と「ネットワーク」

「助け合いが当たり前の社会にならないと…」お話していて、中野さんの口から頻繁に聞かれた言葉である。「今は人と人のつながりが薄くなって、自分さえよければいいという感覚の人が多いいけれど、いつ自分が大変な立場になるか分からない。だからこそ、自分が元気なときに人の手助けをしなければ。自分を犠牲にして人のために尽くしているわけではなくて、困ったとき助けてもらえるようなくみ作りを、自分のため、自分の大切な人のためにやっている。」と中野さん。

「いいね金沢」では、利用者がスタッフにもなり、スタッフが利用者にもなる。一方的にお世話する側・される側という関係ではない、この垣根のなさ、双方向性が魅力のひとつ



「ふれあいサロン」にて

つと感じた。また、他団体とのネットワークも強み。石川県七尾市で「いいね金沢」と同じような活動を行っている「オリーブの会」や、コープいしかわの「くらし助け合いの会」、シングルマザーの支援グループ「シマック」、市内の作業所など複数団体と、人手の足りないとき、あるいは地理的に人が派遣できないとき、自分の団体では対応できない依頼がきたときなどに、サービスの相互代行を行っている。団体同士でも「助け合い」なのだ。また、スタッフにもなり、利用者にもなるという関係が、団体間相互でも成立している。例えば、養護学校に通う子どもの親が「いいね金沢」のスタッフ登録をしている一方で、「いいね金沢」のふれあいサロンを利用して健常者と交流する場をもつといった具合である。今後時間預託の導入も予定しており、時間預託を行っている全国の組織とネットワークすることで、全国規模の「助け合い」の実現を目指している。

### 活動の広がりをめざして

今困っていることは？の問に、笑いながら「お金がない！」と即答された。無償では気兼ねして頼みにくいことを考慮し、サービスは有償だが、その料金はほぼ実費の状態だからである。しかし、続けて「お金はないけれど、とっても豊かになった。助け合える仲間もできた。」という中野さん自身、「いいね金沢」をはじめたことにより、たくさんの人と出会い、生きがいを感じながら充実した毎日を過ごしている。一人ではできないことでも、仲間が集まるとできる。他のメンバーにも「いいね金沢」をステップにして生き活きと人生を生きて欲しいと中野さんは願う。実際、ここできっかけを得て、新たに同じような団体を立ち上げようとしているスタッフもいるそうだ。

活動の継続性・信頼性確保のためにも、現在NPO法人化の準備中。現在は「善意」と「助け合い」が活動の原動力。だが、安定的・継続的に活動を展開していくには、財政基盤の

安定化と人材育成は不可欠である。法人化をひとつのきっかけに、財政面、組織面での強化を図りつつ、これまでのような心の通い合う助け合いの輪をますます強めていって欲しい。

「いいね金沢」では、会の主旨に賛同し、支援してくれる賛助会員を募集している。寄付も随時受付ける。その他問合せは以下まで。

有償ボランティア団体

さわやか「いいね金沢」

TEL&FAX 076-247-9117

e-mail iine-k@spacelan.ne.jp

報告：金沢大学経済学部助手 吉村未紀子

執筆協力：金沢大学大学院社会環境科学研究科

菊本 舞

---

### 編集後記

日本はどこに向かおうとしているのでしょうか。そして、その方向は私たちの望む方向と一致しているのでしょうか。自分の暮らしのすがすがしさが、あまりに無防備に“人任せ”にしている日常に気づかされます。(Y)

---

地域経済ニューズレター第59号  
2002年5月30日発行

発行／金沢大学経済学部地域経済資料室

金沢市角間町（☎920-1192）

☎（076）264-5438

編集／金沢大学経済学部

地域経済ニューズレター編集委員会

印刷所／金沢市中村町28-14

（株）谷印刷

☎ 242-7267

---